

HITOTSUBATAGO NO. 7

ヒトツバタゴ



トラフヒトリ *Callimorpha histrio* WALKER

対馬生物研究会

January 1990

オウゴンオニユリ発見の歴史と栽培

岡部 虎男

この対馬は世界唯一の、オウゴンオニユリの発生地であり、自生地です。このオニユリは、日本本土の朱赤色オニユリ（3倍体）の黄色の花とっていただければいいと思います。オウゴンオニユリは2倍体の朱あかいろのオニユリの種子から、突然変異で発生したもので染色体は $2n=24$ です。

大阪学院大学の野田昭三博士の昭和57年7月以降の調査によると、採集地点26ヶ所のうち3倍体のオニユリは、わずか6ヶ所で全体の約25%、残る20ヶ所は2倍体で、全体の約75%は2倍体のオニユリであり、圧倒的に2倍体が多いようです。

オニユリの2倍体と3倍体が混生しているのは、島国日本でも対馬だけのようで誠に貴重な存在です。

黄金の花のオニユリは中国の文献にあると言う説もありますが、今日まで明確な調査はなされていないらしく、対馬のオウゴンオニユリが唯一のものと思われます。

対馬には現在も栽培されているものが多数あります。私は1977年7月29日に野生のものも確認し写真におさめることが出来ました。また、珠芽も4個採集し栽培しております。これは1980年から毎年美しい花を咲せております。

昭和8年の発表

オウゴンオニユリが発表されたのは1933年「植物研究雑誌」に牧野富

太郎博士によります。

この牧野博士が発表されたオウゴンオニユリは、今は亡き対馬巖原町出身の中尾信吉氏（対馬高等女学校教諭）が牧野博士に送ったという説と、同じく対馬出身の原友一郎氏（小学校校長）が牧野博士に送ったという説がありますが、いずれにしても東京小石川植物園で開花したものを見て、牧野博士が「植物研究雑誌」に発表されたものです。

この中尾、原両説のうち、私は中尾信吉氏説をとっています。というのは昭和47年2月中尾家の遺族の方に面会し、中尾氏が牧野博士に送ったオウゴンオニユリは上県郡の女連（うなつら）で入手されたものがはっきりしていることと、現在も同家の庭で、女連系の子孫が毎年花を咲せているからです。

オウゴンオニユリの栽培

地植えの場合

オウゴンオニユリは2倍体のオニユリで種子、珠芽、木子、りん片、球根と5つの繁殖栽培法があります。オウゴンオニユリは、朱赤色の花のものから、突然変異で生れたオニユリの変種とされますので、朱赤色のオニユリよりも劣性で弱体のはずですが、私が地植えしたものでは、1 m 8 9 cmまで生長し、十数個の花をつけた記録もあり、さほど弱体とは思われません。オニユリは東方に面し、朝日を受ける傾斜地に自生しているものが多いようです。ユリの全長の四分の一位は下草に覆われているようなところによく繁殖していますが、道路工事のために掘り切った岩壁の切立った岩場の、土もないような所にも自生しているものがあり、毎年100本あまり花が咲き、多数結実しているものがあります。

場所の選定

地植えの場合は、鉢植えとは違って移動できないので、第一に栽培する環境に注意することと、夏季午前中だけ陽光を受ける塀や建築物の東側、樹木の陰等で、盛夏の強い西日を避ける場所を選ぶこと。適当な場所が得られない場合は、ヨシズをかけるとか、遮光用の寒冷紗を張るのに都合のよい所を選びます。

用土

オニユリは夏の花であるのに、排水がよくてなお保水性のある土を好むようなので、土質が悪ければあらめの砂や小石、腐葉土を多めに施して深耕します。このとき、乾燥した鶏糞や骨粉を土に混合しておきます。乾燥が激しいときは、植え土の表面に敷きわらをしてやるのも一つの方法です。

植え方

適当な場所と土が出来たら、球根の高さの2倍から3倍の深さに球根を植えます。間隔は20cm以上、30cmはあけたほうがよいでしょう。

ユリは上根と下根があり、上根は球根の上から茎の地表までの間に発生するの根で、主に養分を吸収するもので、毎年初秋に茎葉が枯れると同時にこの上根も枯死してしまいます。下根は球根の下に出る根で、草や木でいう底根（ごぼう根、直根）にあたるようで、養分の吸収よりも風雨にたおされないように球根や地上の茎葉を支えるのが主な役割のようです。この下根は私の推測では2～3年位は生きています。

球根が少なくて庭の隅や、花壇の一部に植えるときは、小石で囲うとか、木箱や発泡スチロールの箱の底を抜いて、地表に1～2cm位出るようにしてその中に植え込むようにし、球根を植えた場所をはっきりさせます。3月上旬に発芽するまで半年以上地中にあるので、除草とか寒肥を施すとき都合が

良いし、囲いの中だと発芽時に特に注意できますので、頭をだしはじめた芽を痛める心配もありません。また、犬や猫に荒らされるので十分に注意してください。

アブラムシの駆除

3月上旬（対馬では三月五日前後）芽が顔を出したら、殺虫剤ダイシストンを地面に散布し、軽く表土に混ぜます。これはウイルスを媒介するアブラムシを防ぐため、その後は毎月1回位投与することになっています。ウイルス病はユリの最大の敵で、この病気が発生すると珠芽も菌に犯され珠芽からの繁殖もできないこととなりますので、特に注意しなければなりません。

ユリの成長期が梅雨季前後で、各種の病菌や害虫が発生する時期なので、消毒、殺虫は入念に行います。少数の場合はスプレー式の殺虫殺菌剤で間に合いますので、つとめて実行していただきたいと思います。

肥料

一月末に一回、油かすに骨粉を二～三割混入したものを、球根から十五cm以上離し、一球あたり小サジ四～五杯、大型固形のものなら三個位をあたえます。その後は五月まで毎月一回施肥し、五月で肥料は止めます。

対馬での開花は七月中旬で、良くできれば一m五十cmから二m近くまでのびますので、添え木はぜひ必要です。球根から五～十cm位離して立て、成長にしたがって添え木に十五cm位の間隔でむすんでいきます。

花が終わるとすぐお礼肥として、速効性肥料を与えることが大切です。花後の茎や葉を一日でも長く保たせることが、球根を肥育充実させることになり、翌年の花に大いに関係しますので、花後の肥料や殺虫殺菌の手入れは忘れてはなりません。

花後の手入れ

種子を採る必要がなければ、花は一日でもはやく切りとったほうがいいことはいうまでもありません。花卉が落ちて種子が上向きになるものは授精しているのわかりますが、種子を一個でもつけると茎も葉も種子が充実するまで（十月頃まで）枯れないので、球根のためにはよくありません。以上が、地植えの場合の私の栽培法です。

鉢栽培

鉢

球根の直径3cm前後であれば腰高駄温鉢七号以上の鉢に一〜二球とし、それ以上植えることは無理のようです。鉢植えても良くできると1m五十cm前後には生長し、花も多いときには十輪前後つけますので、あまり好ましくありません。添え木もぜひ必要ですが、あまり多くの添え木を立てると見苦しくもありますので、美観上からも一、二球植えが望まれます。

用土

次に培養土ですが、必ずこれでなければならないというのではなく、各地方で入手できるもので十分です。ただ、排水と保水性のある培養土を使うことと、消毒殺菌を励行してください。参考までに私の培養土を紹介します。

宮崎県産の日向土（ぼら土）小粒六、硬質の鹿沼土二、赤玉土二（鹿沼土赤玉土は七mm目のふるいを通し、三mmのふるいでミジンを抜き、これに腐葉土（蒸気消毒殺菌したもの）を二割をくわえたものです。

植え方

鉢底に二cm位小石を入れ、培養土を少量入れて、球根を静かにおきます。このとき球根の底根を折らないように注意しながら土を入れていき、ついで球を持ち上げながら土を入れ、球根の高さの二倍位、鉢の縁から一cmのところまで土を入れます。この間に、骨粉の粗いものを適宜、少量いれてゆきま

す。土を入れ終わったら鉢の縁を軽く叩いて土を落着かせます。

私は、その上に山砂の粗めのものを、薄く敷きます。培養土が隠れる程度に敷き終わったら、バケツに水を入れ、これに鉢を入れて十分に吸わせます

この際、山砂をしくことによって、軽い鹿沼土や腐葉土が浮くのを防ぐことができます。また、新しい駄温鉢は意外に水を吸うので、二十分位は水につけておくと良いでしょう。

植え土の上に敷いた山砂は、その後の灌水や大雨の際に植え土が飛び出さないためにも良いようです。灌水の目安は鹿沼土の五～十mmの物を山砂の間に二～三箇所の上から見えるように埋めておき、これが白く乾いたときとします。灌水は鉢の底から水が流れでるまで十分に行います。植え込みは九月中ですが、寒くなってもよいようです。

肥料

翌年一月まで与えません。一月下旬に油粕に骨粉二～三割を混合したものの固形なら三～四個、粉末なら小サジ四～五杯を鉢の縁ちかくに与えます。その後は一回、五月まで施肥し、五月以降は施肥しません。

害虫対策

三月上旬発芽したらすぐにダイシストンを小サジ一杯位与えます。（以後毎月一回）

開花までの管理

三、四、五月は一日中日光の当たるところが良いのですが、西日が強くなってきたら西日避ける場所に移動させます。茎が二十～三十cmに伸びたら一m位の添え木を立て、生長するにしたがって添え木に結んでゆきます。生長期が梅雨期前後なので、害虫や病気が発生しやすいため、殺菌殺虫を怠らないように注意します。地植えのところで書きましたが、アブラムシには特に注意します。あまり長雨が続くときは軒下に入れます。

七月中旬からは花は次々に咲いてきますが、終わった花は順次切り取ります。種子を採る必要のない場合は一日でもはやく切りとることです。

花後の手入れ

花が終わったらお礼肥を必ず与えます。地植えの時と同様、花後一日でも長く莖葉を保たせることが球根のために良く、翌年の花のために良いことです。

鉢植えの物は上根が鉢の中全体に回って枯れていくので、茎が枯れたら軽く引くと抜けます。できれば、この時期に新しい培養土で、植え替えをして下さい。古根が鉢の中で腐敗すると種々の病気も発生しかねませんので、私は、毎年植え替えることにしています。このとき球根の薬液消毒が望ましいのですが、もし、面倒ならばせめて水道の水を少し強く出して、古土を完全に落としてやります。下根はいためないように注意します。枯れた底根は切りとり、白色の根だけ付けておきます。作業中、球根も下根も直射日光に当たるのはよくありませんので、作業は、日陰で行います。

繁殖

珠芽と木子の栽培

木子は球根から土の表面までの莖の地中に出来ます。できれば大、中、小に分けて植えること。一個のムカゴが一g前後の大きいもの、木子の大きいものは、一作で花を咲かせるものがありますので、分けて植える方がよいようです。中形のもの葉が数枚と莖も出ます。良く出来ると二～三年で花をつけます。小形のもの一年目は一枚葉で、三～四年栽培しないと花をつけません。

培養土は鉢植えとおなじでよく、数が多ければプランターや発泡スチロールの魚箱のお古でもよいでしょう。覆土は珠芽の上に5mmから1cm以内で十分で、これにも粗めの砂を植え土が見えない程度に敷いておきます。寒中でも対馬の場合は露地でかまいません。

オウゴンオニユリの自生地について

國分英俊

オウゴンオニユリの自生地については上県町の女連が有名である。女連の自生地は現在どこであったのかについては、漠然としていて、女連のI氏宅の裏山、あるいはサナデということ以外知ることが出来ない。

ところが、上対馬町に自生地が1ヶ所あり、現在でも自生しているのである。1988年に行ったところ開花前であったが、たしかにオウゴンオニユリが2本生えていた。1989年に行ったところ、残念ながら開花はしていなかったが1本ほそぼそと生きているのを見ることが出来た。しかし、ほそぼそとであり木の勢いも非常に弱いものであった。来年でるかどうかは非常に不安である。

現在、日本でのオウゴンオニユリの自生地は上対馬町が唯一であろうと思う。この貴重な自生地を保存するためのだてを早急にうたなければ絶滅は時間の問題のようである。

幸いにも、岡部会員によってオウゴンオニユリの繁殖法は確立されているし、少数であるが上対馬町のオウゴンオニユリもムカゴにより増殖もはかられているので、種の絶滅というのは防ぐことができるのではないかと思う。

この、世界でも他では見ることの出来ないオウゴンオニユリの自生地を守りたいものである。また、増殖することにより、自生地の公園化（自然のままの）もできるであろう。

※女連のオウゴンオニユリと上対馬町のオウゴンオニユリの違いは細胞学的にもちがうであろうが、花卉の斑点が上対馬町のものが細かく比較すれば

すぐにわかる。また、ムカゴのつきかたが上対馬町のものが非常に少なく、繁殖が悪い。

(久原中学校)

HITOTSUBATAGO No. 7

対馬の生物目録の整備をすすめては

國分英俊

現在、多くの研究者によって、対馬の生物に関する研究物が出されているが、どこで出版され発表されているかを知る機会は少ない。よって対馬に住んでいながら、対馬の生物について、知らないことが多すぎるような気がする。

そこで我々対馬に住み、生物にわずかでもかかわりを持っている者が、得意な分野で調査を行い、生物相の解明の基礎となる生物の分類をしてはどうだろうかと思う。口で言うのは非常に簡単であるが、実際に調査をするとなると専門的知識を持っていない、又調査をこまめにやることがない、いつでもやれる等のことがあって、現時点では何もできていないのが現状のようである。時は過ぎていくのである。当然開発も進み、生物の生存域もここ対馬でも徐々にではあるが狭められているはずである。

せめて、生物を自ら分類し、以前の文献を精査し生物目録をつくってみたらということを考えるのである。時間もかかるであろうが、ぜひやるべきであると思う。それぬきにして自然保護うんぬんは。言えないような気がする。1990年を飛躍の年にしては。

(久原中学校)

対馬ぶらぶら採集記

杉 憲

“春の海、ひねもすのたりのたりかな。”……ああだれかいなあ。

この年寄りを起こしなさるのは！ せっかくの小春日和のまどろみを邪魔しなさるのは！ なになに。おおっと、こりゃじじいの出番かいな。

こりゃしまった。御免なさいよ。 じゃ、まあ、昔話、ぼちぼち始めようかねえ。……おおねむい あああ。

対馬の春は梅に鶯で始まりますな。二月も終りに近づき、水ぬるむ頃になりますと早出のモンシロチョウがじじいの心をくすぐります。……そうだったねえ、春三月から四月にかけては野球のオープン戦さながら、まず巖原小学校裏の後山から出会いが始まります。

新芽吹く草木の中を、春陽で蒸された枯れススキの香を追って登ってゆく。街が眼下になるにつれ心地好い風が吹き抜けていきます。山頂で一息ついてみると、アゲハ、ミヤマカラスアゲハなどが蝶道を通して挨拶に訪れます。かわいいもんじゃて。……暫く座って眺めておりますと、そのそばではミヤマセセリやルリシジミなど、春を告げる蝶たちが陽だまりの中で遊んでおられます。春の海を楽しみながら、今日も蝶たちと戯れた一日が暮れてゆきました。

さてさて、五月から六月にかけて舞台は一転して浅茅湾は東のはずれ、大船越へと移ります。今でこそ立派な赤大橋が架かっておりますが、あんころはねえあんだ、木と土の橋で、バスが通るたびに土ぼこりがすごかったんじゃよ。 いやあほんによくなったねえ。 ええっと、そうそう、橋のたもと

い一心ですな。こん蝶々に初めてお目にかかったときは、いやあ、もう、言葉にならんかったですぞい。美しかあ！ 普通、俗人（御免なさいよ。）は、有明山の禿げ上がった山頂目指して登っていくわけじゃが、わしらのような粹人になるとちと趣が違いますな。ほれ、巖原八幡から登ると、かなり頂上近くになってから暗い林をぬけるでしょうが。ここをぬけてから頂上までの間は左右に木を切り分けてある防火帯になつとりますな。ここ！ここ！ここなんじゃ！美人のお姫様が住んでおられるのは。この防火帯の左右にそびえ立つアカガシこそがお姫様のお城なんであります。わしらひと夏に三～四回会いにいくんじゃが、禿げ上がった山頂まで登ることなんてほとんどありゃあせんよ。

このお姫様達にお目にかかる時も、例によって長い綱でお目覚め願うわけじゃがねえ。大船越のような低い木じゃありゃあせんもん、そりゃあ大変なものじゃったですぞい。子供ながらに直径約九センチメートルもの太いつぎ竿を担いで登山する姿を想像してみんですか。ましてそん竿を五本ついで七メートルにもしてぶんぶん振り回しとるんじゃからねえ。いやあ、ほんにまともなこっちゃあないですぞ。

そんなこなして無事お目通りかないますと、喉が乾いてくるもんですな。ちよいと一服と言うことで下の谷川にでも下りてみようかね。ここでは、まあ、ようけへびに出くわしましたが、一度も噛まれなんだはやっぱり人徳の成せる技じゃろうかいのう。フォッ、フォッ、フォッ……

ちなみに若きその頃は、登り五十分、下り十五分の記録もあるですよ。いやあ、遠き昔、若き日の思い出ですな。 いやいや、ほんに歳を取ったですぞい。……あーあ いやだいやだ

そうそう、夏といえば佐須奈へも行きましたなあ。あの知る人ぞ知るツシ

マウラボシジミに会いにですよ。・・・なに!・・・知らん!・・・あんたもっと勉強せないけんぞなもし。彼女に初めて会うときはビックリしましたなあ。こげな暗いとけえ蝶々がおっとかいな。杉林ん中、ひっそりとしとってね、ときおり野鳥のけたたましい鳴き声が聞こえて参ります。後はシーン!・・・水を打った静けさです。かすかな木洩れ日を頼りに道なき道を行きますと、先のほうで何やら白いものがチラチラ動きます。　　アッ!

心臓は早鐘を打ち出します。「ウラボシだっ!」・・・もう次の瞬間はどこをどう走っているのやら、気がついた時は彼女を胸に押しいだき感激に震えているんですなあ。振り返ってみれば藪があったり危ない崖があったりで、・・・おおこわ。

上島の方へ出かけるのはこれぐらいでしたなあ。まあ、子供のこっちゃもん。しょうがないねえ。小遣いも少なかったし。・・・ブツブツ

おやまあ、また少し話がおかしくなってきましたな。なんせもう歳が歳じゃけボケ気味なんじゃ。御免なさいよ。・・・では続けることにしましょうかいの。　　アハハハ・・・

夏もゆき秋風の頃になりますとまたまた舞台が変わります。ここまでくれば地の果てまでもどこまでも。　　ええい!・・・今度は対馬南端豆酩八と足をのぼすべえ。

あの頃、厳原を八時五十分頃のバスだったでしょうなあ。十時過ぎに着きましたな。豆酩崎まで片道三キロメートルほどを三往復ほどしますよ。ここではホレ、あれですよ。南風に乗ってやってくる迷蝶のお出迎えですよ。豆酩崎付近ではスジグロカバマダラ、メスアカムラサキ、アオタテハモドキなど南方系の蝶が、実にカラフルな色彩の舞いを見せてくれます。こりゃあこの世の極楽。もう、ひとつの事件ですぞ。確実に会えるという保証はなんもなし。時間と場所の二つの偶然の成せる技ですからねえ。もう、会えたとき

の喜びはなんとも言い表せませんなあ。「おやおや、おなかがすいて来たぞ。イモでも食うべえ。」などと思うたか思わなんだか、足は街中のイモ畑へと向かいます。サツマイモを食草とするリュウキュウムラサキとの出会いを期待しているわけです。まあ、彼女に出会うときはお百姓さん、真にすまんこってス。惚れたからにはどこまでも。もう目の前その蝶々だけ！道も石も岩も川も人もなァんも無くなります。ただただ走るだけ！ハッとわれに帰り、後ろを振り返るとイモ畑はムチャクチャ。よう怒られたもんじゃがね。なんせ畑仕事をしよられる、その目の前を網振ってドタバタじゃもんねえ。

そうじゃそうじゃ、思い出したぞ。豆蔵崎でスジグロカバマダラ追っかけた時は死ぬ目におうたですよ。やっぱ目の前その蝶々だけ。ひたすら道を下って追っかけた。残念無念、われに返ったその瞬間。何と！道なんてありゃあせんもん！ほぼ垂直に近い崖のど真ん中。下見りゃ荒海波しぶき。降りた時間の三倍もかけて這い上がったこともあったぞな。命あつての物種じゃあ！
・・・おおおおおおおお、こわ！

そうそう、もひとつ忘れてはいけないのが小茂田ですな。こりゃもう相当昔のことだども、タテハモドキという蝶々が小茂田で捕まりましてな。わしも秋口にはよう足を運んだもんじゃて。大正橋でバスを降りましてな。今みたいに綺麗じゃあなかった郵便局の前の店でぶどうパンやミルクパンを買うてね。小茂田浜神社の付近をうろつくわけです。あの頃、まだあの辺りは沼みみたいに草が生い茂っておったんじゃがねえ。今は綺麗なもんですなあ。
・・・ええっと、そこに二、三年通いましたかなあ。結局お目にはかかれませんでね。「あのタテハモドキはまぐれのまぐれじゃ。」っちゅう話になって

しまいましたかね。・・・ウーン・・・・・・・・・・・・・・・・

さてさて、ポカポカと暖かい小春日和の縁側でこうしていると、ついつい話が長くなってしまったがね。 あーあ、眠い眠い。・・・はよう春がこんかいねえ。あったかい春が。・・・ほんにはようこんかいねえ。・・・あーあ・・・・・・・・眠い眠い。・・・・・・・・はよう春よ・・・・・・・・春よ来い・・・・・・・・

・・・おしまい・・・

(鴨居瀬小学校)

HITOTSUBATAGO No. 7

《対馬植物学ノート・2》

カワモズクの生息地

永留 浩

カワモズクはカワモズク科、カワモズク属、モニリフォルミア節カワモズク (*Batrachospermum moniliforme* ROTH)。美津島町の川に1か所と巖原町の2河川に3か所生息している。巖原町の方は川の中流と下流である。美津島町の方は扇状地状の中央に小川があり湧水している所であって淡水産紅藻の生息地である。

藻体は紫褐色、造巢器をつけた枝は輪生枝から、または輪生枝基細胞から発出、受精毛は棍棒形、徳利形または壺形、のう果は球形で小さく輪生枝叢内の中軸からさまざまな距離に多数散在して形成される。カワモズクはシャントランシア期の平臥系、直立系の枝から発出したもので平地の湧泉などのきれいな流水中に生育している。

(西部中学校)

対馬にコンブが産する

國分英俊

対馬にコンブが産すると表題に書いたが、信じられない方も多いことと思う。書いている本人でさえ見るまでは信じるができなかつたのであるから。3年位前になるが鰐浦にコンブがあるということを知った。しかし、コンブは日本の北海道が主な産地でまさか鰐浦にあるはずがないとそのままにしておいた。たまたま同じ学校に勤務する先生の中に鰐浦出身の方がおられその話しをしたところ、たしかにあるとのことであつた。時期になつたら持ってきてあげようとのことであつたが、すっかり忘れていた。3月だつたらうと記憶するが、そのコンブが私の手元に届けられた。確かにコンブのようであるが、水にもどしてみないと分らないので家に戻ってやってみた。本物のコンブである。味をみようとして煮しめにしてみたが普通のコンブよりやわらかく上々である。特にお年寄りにはよいとおもつた。

このコンブを図鑑で調べてみたが残念ながら種名は分らなかつた。図鑑には九州にコンブがあるとどこにも書いてない。もしかして九州の自生コンブについての論文？はこれが最初になるかもしれない。

1989年度のひとつばたご祭りはにぎやかであつた。鰐浦コンブが出店にでており、これが特産品になればと内心思ったが、なにせ生産量が少ないとの事であり難しそうである。

(久原中学校)

キビヒトリシズカの対馬産地発見

永留 浩

キビヒトリシズカ (*Chloranthus fortunei* SOLMS-LAUB)は中国中部に分布の本拠をもち、南朝鮮から対馬、宍岐、九州、本州を北上し関東の各地で発見されている大陸系の植物である。キビヒトリシズカを私が発見したのは1975年4月2日の植物調査で美津島町雞知字千馬原である。このことは、美津島町誌(昭和53年発行)の「五・植物編・1・7」に略記している。

キビヒトリシズカについて概要

キビヒトリシズカはヒトリシズカに似た多年生草木で、草丈は30~40cmに達する。3月中旬頃になると根茎から徐々に芽を出しはじめ、細長い茎を伸ばし、はじめ下向き地上10cmぐらいから葉芽は次第に直立する。全草は無毛平滑で暗紫色。芽が開きはじめると、中から淡い帯緑色の美しい花穂が見える。花穂はしだいに純白に変わり、茎の頂にある仮輪生または対生葉の中央の柄の先で3~4cm長になる。花穂を構成する個々の花が大形のため満開になると大きい白い筆の穂のように見えるのでヒトリシズカの小形の花の花穂とは区別がつく。キビヒトリシズカの花穂は裸花で苞が雌蕊と雄蕊を外から抱くようにつき、がくの役割を果たしている。葉は有柄で卵状楕円または楕円形で長さ3~6cm、幅2~4cmで鈍鋸歯がある。色は光沢がなく黄緑色でヒトリシズカの深緑で光沢があるものとは区別できる。また、2~3対で節間の短縮した形の仮輪生が多く、対生だけのものや上仮輪生、下対生、そのまた逆のものなどある。対馬の分布は、美津島町の東側の千馬から玉調に限られているようです。対馬の北部、南部等でも今のところ発見されていません。

(西部中学校)

1988年 対馬のゼフィルス

浦田明夫

長崎県高校総合体育大会は、例年6月初旬に実施されている。ここ数年その監督または引率者として参加することがなくなったので、この時期は対馬のゼフィルスを追うことにしている。

1988年6月4日、発生地へと向かう。自動二輪車で25分も行けば現地にたどりつく。ここは長崎県内で筆者がアカシジミやミズイロオナガシジミを発見、採集した地域であり、同時期には、オオミドリシジミやウラジロミドリシジミなども採集できる地域でもある。

しかし、30年前頃の環境とは全く異なり、当時の面影はほとんどなく、以前よく歩き採集した場所がどこであったのか戸惑いさえ感じられた。かつての道はなくなり、雑木林になったり、スギやヒノキの植栽で、チョウの姿は極端に少なくなっている。

さて、今回の遠征もあいにくの天気で、特に風が強い。これではチョウの飛び出しようもない。林縁や樹冠をたたき、やっと飛び出してきたものを採集したのは、

アカシジミ 3 exs.

ミズイロオナガシジミ 1 ex.

のわずか4頭であった。他にはキチョウとアカタテハが目についたが、捕獲はしなかった。

翌日（6月5日）再度採集を試みるつもりでいたが、風がやはり強く、雨模様のため中止。結局1988年の採集記録は下記に示すだけにとどまった。

1988年6月4日

アカシジミ 3 exs.

ミズイロオナガシジミ 1 ex.

対馬美津島町大船越

採集保管

浦田明夫

(琴海高校)

HITOTSUBATAGO NO.7

クサガメの産卵

浦田明夫

対馬にはクサガメは比較的多い。筆者は対馬高校で、多い時には7匹のクサガメを飼育していたが、その中には4回も冬越しした個体もいた。

ところで、対馬高校で飼育中の1匹が産卵したので、記録しておきたい。

1985年 対馬高校で飼育

No.	1	2	3	4	5	6	7
産卵日	7/31	7/31	7/31	7/31	8/16	8/19	8/24
長径	34	35	35	?	32	?	34
短径	20	20	20	?	18	?	20

単位mm

卵形は平面的には小判型で、色は純白で斑紋はない。

7月31日に4個産卵していたが、これはその日に4個産卵したとは考えられず、産んでいたのをその日に気づいたと考えるべきであろう。約1か月にわたり合計7個産卵したが、これはいずれも無精卵であることがわかっていたので、そのまま、対馬高校生物教室に保存している。なお、No.4とNo.6は気付いた時はこわれていたので、大きさは測定していない。クサガメはこうして飼育されているうち、産卵するケースが多いが、こうした卵には無精卵が多く、ほとんど孵化しないのが普通である。

クサガメの卵についてはほんかいの佐伯正發先生も先般の写真展に出品されておられたが、筆者も写真撮影している。

(琴海高校)

HITOTSUBATAGO NO. 7

アマガエルの体色の異常とその個体の発見

浦田明夫

カエルの体色の色彩は皮膚に散在している色素細胞によって決まっているが、この細胞は表皮のすぐ下の真皮内にあつて、一番表面に近い層は黄色色素細胞で黄色の脂肪粒を含み、赤あるいは黄色の色彩に関係し、多数の細長い反射小板で満たされている。その下層には銀色に輝くグアニン細胞、そしてメラニン顆粒を父君だ黑色色素の細胞の三層から成る。

アマガエルが緑色の葉上にある時は、メラニン色素が黑色色素細胞の中心に凝集し、上層のグアニン細胞は反射しやすいように偏平になる。そこで黄色細胞を通過してきた光はグアニン細胞で反射して、黑色色素細胞の影響を受けないので、体色は黄緑色となる。ところで、この黄色色素が何らかの変異

で消失してしまって、通常の緑色があせて青色になると体色はコバルトブルーの美しいかわって色彩を帯びるようになるのである。そしてこの個体は黄緑の体色にもどることはない。またこの脂肪性の黄色色素はアルコールに溶ける。アルコールづけのアマガエルの標本が青味がかって見えることがあるが、これは前述の理由からである。

また黒色色素が欠けるとアルビノ（白化型）ができるが、アカガエル、ヒキガエル、ツチガエル、アフリカツメガエルなどで知られている。アフリカツメガエルのアルビノを筆者は現在、4匹飼育しているが、体色は白色ではなく淡い黄色で、まさに黄金のカエルという感じがする。また、ツチガエルのアルビノは、佐世保で捕獲されたものの写真をもっている。一方、アホロートル（メキシコサラマンダー、ウーパールーパー）の幼生を飼育したことがあるが、このアルビノは純白で、その体色を流れる血液の色が美しい淡いピンク色を示すことは近頃よく知られているようである。

ところで、1987年10月、対馬新聞社の野田真佐雄氏が変わった体色のカエルを捕まえたので調べて欲しいと、当時、国立対馬病院に入院中の筆者のもとに届けてもらったのが、アマガエルのコバルトブルーの美しい体色をしたカエルであった。生きている時のあのカエルの色は日本産のカエルとは思えない色彩であった。これは前述のように、脂肪性の黄色色素が何らかの変異を起こした結果生じたもので、対馬では初めてのものである。この標本はアルコールにつけ対馬高校に保存しているが、体色変化が起こるので、カラーズライドにもそれを撮影し、記録している。

最後に珍しいカエルを提供いただいた野田記者に感謝の意を表する。

アマガエル 体色コバルトブルー

1987年10月

対馬巖原

野田真佐雄採集 対馬高校保存

(琴海高校)

オオキツネノカミソリの発見

(*Lycoris sanguinea* Makino var *kiushiana* Makino)

國分英俊

1989年7月26日、上県町目保呂でオオキツネノカミソリを発見したので報告する。

場所は県道から1 km位入ったところで、日当りのよい道路ぞいに数本生えているのを見ることができた。

キツネノカミソリとオオキツネノカミソリの見分けかたは、オオキツネノカミソリの開花がキツネノカミソリよりも約1ヶ月位はやいこと、雄ずいが花披片よりも長いことにより区別することができる。

分布は本州（関東地方以西）四国、九州。対馬での発見は目保呂だけであるが、気をつければ他地区でもみつかることが十分予想される。

（久原中学校）

ゴイサギの集団越冬地

國分英俊

上県町鹿見の標高数十mの南側斜面に、秋になるとどこから来るのか分らないがゴイサギが越冬にやってくる。その数は数十羽。春になるとどこかへ帰っていくのであるが、冬のあいだ近くにある魚の養殖イカダのところで餌をとって生活している。彼等の生活は昼は木の上で睡眠をとり、夜になると養殖イカダの近くに行き餌をとっている。昼行くと良い写真がとれそうである。ただし、遠くから眺めてほしい。

（久原中学校）

ノゴマ・10月の記録

境 良朗

ノゴマ (*Erithacus calliope*) は、ヒタキ科に属するスズメよりひとまわり大きい鳥である。雄の喉はあざやかな赤色で一見して他種と区別できる。

日本では北海道で繁殖が確認されており、それ以南で観察されるのは秋と春の東南アジアへの、または東南アジアからの渡りの途中である。

鴨川 (1976) によると、対馬では過去6例の観察が記録されている。

例	観察年月日	個体数	観察地
1	1962.10. 1	4	上県町佐護
2	1963.12. 1	3	上県町佐護
3	1963. 3.中	2	上県町佐護
4	1963. 3.中	計21	上対馬町比田勝
5	1964.12.23	3	上県町佐須奈
6	1965. 3.上	計18	巖原町小茂田・瀬

今回、峰町で確認することができたので報告しておく。

[記録]

ノゴマ 1♂ 1989年10月17日 上県郡峰町志多賀

本個体は早朝、小学校の第1学年の教室に迷い込んできたものを児童が捕

えたものである。職員室に持ちこまれたものの種名がわからず、図鑑で調べたあと写真を撮り、児童の手でとき放した。

なお、以前にもツミ、サンコウチョウ、イソヒヨドリ、ホオジロハクセキレイなどが校舎内で捕えられたことがあるので付記しておく。

(志多賀小学校)

HITOTSUBATAGO No. 7

ウエマツソウ (*Sciaphila tosaensis* Makino) の発見

國分英俊

1988年8月、龍良山自然観察の折、ウエマツソウを発見したので報告する。

自生していた場所は龍良山原生林の中腹で、石と腐葉土の間からわずかに姿をあらわしていた。気をつけていないと見落としそうな場所であった。

色は全体があずき色であり、一目見て腐生植物であろうということは察しがついたが、まったく種名はわからなかった。同行していた京都植物同好会の人々が写真撮影し、あとで京都大学の村田源氏にみせられたところ、これがウエマツソウであることが判明した。対馬では新発見である。

ウエマツソウの茎は3~8cm、直径0.8cmで、全体が赤紫色をしており葉は鱗片状で披針形、7~9月に開花する。対馬では8月中旬に開花していた。

分布は本州(中部地方以西)、四国、九州、沖縄であるが、大変まれであるとのことである。

(久原中学校)

◎◎◎◎◎ 編集後記 ◎◎◎◎◎

遅くなりましたが、ヒトツバタゴ№7をお届けいたします。
本来ならば、昨年末までに発行すべきところ、編集者の怠慢で申し
訳なく思います。今年は、4年ぶりに寒い冬が（とは言っても平年
並ということですが）戻ってきました。そのせいではないでしょう
が、ワープロを打つ手がかじかんで思うように仕事が進まなかった
といっても、言い訳には・・・・・・・・。

去年は、永い間、対馬の生物の研究に御尽力いただいた浦田先生
が本土に転勤され、寂しい思いをしましたが、新役員も以前にも増
して「がんばろう」と決意も新たにしているところです。

本号は、6名の会員の皆さんから投稿いただきました。内容も植
物、鳥、両生類、昆虫、提言とバラエティーに富むものとなりまし
た。特に、初めて投稿いただいた永留会員には感謝いたします。気
持ちはあっても文章にすると、なかなか面倒だとは思いますが、
今後とも気軽な気持ちで原稿をお寄せいただきますようお願い
いたします。本誌はコピー印刷をしていますので、白黒写真や付
図は載せることができます。

去年は、編集者の研究分野の蝶やトンボの仲間でも、対馬新記録
が報告されました。調べ尽くされているようですが、まだまだ何が
出るか分からない状況です。自然は奥が深いのですね。

```
*****
*
*          ヒトツバタゴ NO. 7          *
*          対馬生物研究会誌          *
*
* 発行所 対馬生物研究会          *
*          長崎県上県郡上県町鹿見588  *
*          ☎09208-5-0832          *
*
* 発行日 1990年1月31日          *
*
* 編集      境 良 朗          *
*
*****
```

目 次

- オウゴンオニユリの発見の歴史と栽培・・・岡部虎男・・・ 1～ 7
- オウゴンオニユリの自生地について・・・國分英俊・・・ 8～ 9
- 対馬の生物目録の整備をすすめては・・・國分英俊・・・ 9
- 対馬ぶらぶら採集記・・・杉 憲・・・ 10～15
- カワモズクの生息地・・・永留 浩・・・ 15
- 対馬にコンブが産する・・・國分英俊・・・ 16
- キビヒトリシズカの対馬産地発見・・・永留 浩・・・ 17
- 1988年対馬のゼフィルス・・・浦田明夫・・・ 18～19
- クサガメの産卵・・・浦田明夫・・・ 19～20
- アマガエルの体色の異常と
その個体の発見・・・浦田明夫・・・ 20～21
- オオキツネノカミソリの発見・・・國分英俊・・・ 22
- ゴイサギの集団越冬地・・・國分英俊・・・ 22
- ノゴマ・10月の記録・・・境 良朗・・・ 23～24
- ウエマツソウの発見・・・國分英俊・・・ 24
- 編集後記・・・編集部